

2020年8月16日 久宝教会 聖霊降臨節第12主日礼拝

メッセージ「野の花のように生きる」

牛田 匡 牧師

聖書 ヨハネの手紙Ⅰ 5章1-5節

今日は始めに、一つの詩を紹介いたします。坂村真民さん（1909-2006）の「タンポポ魂」という詩です。

踏みにじられても／食いちぎられても／死にもしない／枯れもしない／  
その根強さ／そしてつねに／太陽に向かって咲く／その明るさ／  
わたしはそれを／わたしの魂とする

もうタンポポの季節ではなくなって、今は猛暑の毎日ですが、その中でも草木は緑おに生い茂っています。坂村さんは「踏みにじられても、食いちぎられても、死にもせず、枯れもしない」タンポポの根強さを詠っていますが、事実「雑草」と呼ばれて、人々から抜かれたり踏まれたりする道端の草花は、本当に根強く、アスファルトやコンクリートのひび割れた隙間からも生えていたりします。

そんなタンポポの根強さ、健気さ、一途さに、詩人は心を動かされて、「わたしはそれを、わたしの魂とする」と詠い、坂村さんは自宅を「タンポポ堂」と呼んでいました。坂村さんが、足元で人々から踏み付けられたり、ちぎられたりしても、なお死にもせず、枯れもせず、恨み言を言わず、腐りもしないタンポポに目を留めた背景には、彼自身が明治・大正・昭和と戦争の時代を生き、大戦中には朝鮮半島で師範学校の教員を勤め、戦時教育を行って来たことへの反省や、多くの人々の悲しみや苦しみを目の当たりにして来たことがあったのではないかと想像します。

人の世が混乱し、多くの血が流され、炎に包まれていく様子を、傍らの草木はどのように見つめていたのでしょうか。昨日8月15日は終戦・敗戦記念日でした。75年前にヒロシマとナガサキに落とされた原子爆弾は、巨大な都市を一瞬で焼け野原に変えました。当初は、「原爆で攻撃された所には、70年間は草木も生えない」（1945年8月8日付ワシントン・ポスト紙に「原爆で攻撃された地域は70年間死に満ちる」という見出し記事が掲載された）と言われていましたが、数年後には新しい緑が芽吹き、今では緑豊かな中、人々が行き交う街となっています。

福島第一原発事故の後、放射線量が高く避難指示が出され、今なお「帰還困難区域」として指定されて、立ち入りが禁止されている広大な地域内でも、事故の後もずっと事故の前から変わることなく草木は茂り続けています。また各地で除染した土が詰められたフレコンバッグも、その後どうなっているのか、ほとんど報じられてはいませんが、野ざらし雨ざらしのためにバッグが破けたり、草木が生えていたりしないのか、なども心配になります。しかし、当の草木にしてみると、そこがどこであれ、ただ黙々と芽と根を伸ばしていただけなのでしょう。何故なら、それが植物のいのちの営みだ

からです。人間が創り出した放射能という毒や、戦争という愚かな出来事の渦中にあっても、なお淡々と、黙々と生き続ける植物の強さを思わされます。

今日の招きの詞は、有名な「空の鳥、野の花を見なさい」というイエス様の言葉の一節でした。「働きもせず紡ぎもせず、今日は野にあって、明日は炉に投げ込まれるようなこの草でさえ、栄華を極めたソロモンよりも、美しいものとして、神様は装い咲かせて下さっている」という主旨の言葉です。古く文語訳では「百合」と訳されて来ましたが、この花は恐らく私たちが知っているような百合でも、タンポポでもないでしょう。けれども、このイエス様の言葉を聞いたパレスチナの貧しい小作農民たちにとっては、日々の農作業の傍らで、抜かれ、ちぎられ、踏みつけられている雑草にも、命の与え主の神様からの恵みが十分に届けられているということ、思い起こさせるものだったのだと思います。「まして、あなたがたにはなおさらのことではないか」…。「私たちもまた、神様から根強い命、一途な命を与えられているんだ。だから、諦めずに、腐らずに、自分を殺さずに、命の与え主である神様に信頼して歩み出そう」ということなのではないでしょうか。

さて、先程お読みしました今回の聖書「ヨハネの手紙」は、古くから「ヨハネによる福音書」を書いたのと同じ著者が書いた手紙だと考えられていました。確かに、読んでみると、そこに用いられている言葉遣いや表現、思想は「ヨハネ福音書」とよく似ています。今回の箇所が登場するキーワードである「神の戒め（掟）」や「神を愛する（自分のように大切にすること）」「世に勝つ」などの言葉も、「ヨハネ福音書」にも見られる言葉です。ではこの「神の戒め（掟）」とは何でしょうか……。すぐに連想されるのは、ヨハネ福音書 15 章 12 節の言葉「私があなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これが私の戒めである」でしょう。この「ヨハネの手紙 I」5 章の前の 4 章にも、「神は愛です。愛の内にとどまる人は、神の内にとどまり、神もその人の内にとどまってくださいます」（16）など、愛についての有名な言葉がたくさん記されています。そして、今回の 5 章の直前には、次のように記されています。

「20 もし、誰かが『私は神を大切にしている』と言いながら、仲間を憎んでいるなら、その人は嘘つきです。目の前にいる仲間を大切にしない人は、見たことのない神を大切にすることは出来ないのです。21 私たちには、その方から頂いている掟があります。それは即ち、神を大切にすることは、自分の仲間をも大切にすること、ということです」（本田哲郎訳）。

このように、「目の前の人を愛する、親身になって大切にすることが、他でもない神を大切にすることだ」という理解の上で、今回の 5 章の言葉になりますが、ここでは同じことが違った言葉で表現されています。即ち、3 節ですが、「神の戒め（『互いに大切にし合いなさい』という掟）を守ること、これが神を愛する（大切にすること）ことで

す」。そして「その戒め(掟)は難しいものではありません」と続きます。何故なら「神から生まれたものは皆、世に勝つからです。(ではその)世に勝つ勝利(とは何か)、それは私たちの信仰です」(4) ……。 「世に勝つ」とは、何でしょうか。

この「ヨハネの手紙」では、「この世、世間は暗闇」であり、それに対して「光である神、神の子が勝利する」という対立的な表現がされています。そのために、一見すると「信仰者はこの世の悪・闇に染まらずに、清く正しく生きて行けるのです」と言っているかのように思ってしまう。「イエス様が神の子、キリストである」と信じているならば、信仰者には世間の人々とは違う特別な力が与えられて、それによって世間に打ち勝つ、世間を打ち負かせることが出来る……、そのようなことなののでしょうか。いやむしろ、この箇所が言っているのは、「信仰によって打ち勝つ」のではなく、「信仰の証し、結果として、世間の価値観に流されたり、染まらないでいたりすることがある」ということなのではないかと思えます。

「信仰」とは何か。単に口で、言葉で「神様を信じています。大切にしています」ということではなく、4章(20節)の言葉にもあるように、実際に身近な人たちに対して行動することです。イエス様が身をもって示して下さったように、私たちにもそうすることが出来る、その能力が与えられていると信頼して、歩み出してみる……。世間に打ち勝ち、世間の価値観に流されたりしない秘訣は、そのように歩みを実際に起こしてみることにある……、今回の聖書の言葉は、そのように私たちに告げているのだと思えます。言い換えれば、右か左かどこに正解があるのか分からない、混迷を深めるばかりの世の中にあっても、そんな世間の価値観、価値基準の中で右往左往して迷ったり、諦めてしまうのではなく、まずは目の前の仲間、大切にすべき一人一人に、しっかりと向き合っていく、大切にしてく……。そこにしか、本当の活路はない、ということではないでしょうか。

例年であれば「お盆休み」と言われるこの時期も、今年は毎日コロナの新規感染者の数が「増えた減った」の話でもちきりでした。日々の数字の増減を見ると、「一進一退」のようにも見えますが、少し離れて眺めてみると、全世界的に増加の一途を辿<sup>たど</sup>っていて、ちっとも収束には向かっていないということが分かります。にも拘<sup>かか</sup>わらず、「大丈夫、大丈夫。大したことはないよ」という人がいたり、「感染予防に気を付けた上で、旅行に行って、旅行先でもテレワークをしよう」と政府から言われていたりします。その一方では「感染者の多い都会からは地方に帰省して来てほしくない」と言われたり、県ごとに「緊急事態宣言」が出されたりしていて、どこの誰の言葉が正しいのか、まさに混迷を究めている、迷走中の日本です。「アベノマスク」にしても、「GoToトラベル・キャンペーン」にしても、狂っているとしか言いようがない日本政府ですが、私たちにはこの狂った世界の中で、どうやって生き残っていくか、この与えられ

た命をどうやって使っていくかが問われています。

政治が混迷し、皆が不安や恐怖に怯え出すと、ファシズムが抬頭<sup>たいとう</sup>します。「この不安の原因は、特定の民族や組織、国家である。だから、一致団結して、抵抗し阻止し撃退しなければ、自分たちに未来はない」……。過去の世界大戦の歴史を振り返ると、政治家も軍の将校や指導者たちも、そして市井<sup>しせい</sup>の人々も、議論し考え尽くした末に、最善の選択として決断し、行動したわけではなく、皆がそれぞれに「このままでは立ち行かなくなってしまう」という漠然とした恐怖感から暴走し始めた末に、やがて回り始めた歯車は誰にも止められなくなっていくということが分かります。一人一人の小さな不安を覆い隠すために、分かりやすい共通の敵を作り出す……。ナチスによるユダヤ人の大量虐殺も、第2次世界大戦も、その論理で起こりました。そして今も、世界各地で戦争が続けられ、多くの人々の血が流されています。

また現在、世界を席卷<sup>せっけん</sup>しているコロナ禍<sup>か</sup>も、まだまだ収束はしないと思われ、経済的な格差も今後、全世界規模でますます広がって来ると思われます。私たちの身の回りでも、今後、経営が立ち行かなくなっていく商店や企業などが、増えていくことが心配されます。そのような現実の中で、これまでと同じ生活に戻ることを目指していて、本当によいのでしょうか。恐らく、これまでと同じ社会に戻ることはないだろうと、私は思っています。9年前の2011年の東日本大震災の時、「この大惨事によって、人々の生き方は変わる」と感じましたが、現実には、大多数の人々にとってはあまり変わりませんでした。しかし、「大量生産大量消費」という経済モデルでは、この地球環境があと幾何<sup>いくぼく</sup>も持たないことも、以前からずっと指摘され続けて来ています。新型コロナウイルスのワクチンが開発されたとしても、今年の開催が中止となった東京オリンピックが延期して開催されたとしても、リニアモーターカーが開通しても、大阪万博が開かれたとしても、かつての高度経済成長が再び興るわけではありません。日本社会は、戦後も戦前も含め、これまでの歩みが本当に正しいものであったのかどうかを、謙虚に見直していくことなしには、未来はないのではないかと、思っています。

このコロナ禍を、自分たちにとってどのようなものとして受け止め、意味付けて行くかは、その時々に応じて、私たち一人一人に委ねられています。世間に打ち勝つ秘訣は、共にいて下さる神様に信頼して起こす「身近な人を大切にする」歩みの中にある……。道端のタンポポのように、野辺に咲く野の花のように、根強く、しぶとく、生き続け、太陽の方を向き続ける……。そこにコロナ禍を生きる私たちの歩む道があるのではないのでしょうか。多くの困難や不安もありますが、命の神に信頼して、野の花のように生きる……。身近な人を大切にする、その歩みへと、今日もまた私たちは、共にいて下さる神様に伴われて、歩み出して行きます。